



Data

監督：メリーナ・レオン
 脚本：メリーナ・レオン／マイケル・J・ホワイト
 出演：パメラ・メンドーサ／トミー・パラッガ／ルシオ・ロハス／マイコル・エルナンデス

👁️👁️ みどころ

アルベルト・フジモリ元大統領の娘ケイコ・フジモリ氏は、3度目の大統領選挙も僅差で敗北。現在のペルーは政治的混乱にあるが、1980年代に起きた乳児売買事件とは？

ペルー出身の女性監督が新聞記者だった父親が取材した現実の事件を、少し時代を移して映画化した。そのタイトルはなぜ『名もなき歌』に？まずは、冒頭のブラウン管テレビに見るニュースに注目！

そして、“有権者番号”を持たない先住民の女性の出産に伴う悲劇に注目！メスティーン（白人と先住民との混血）たる新聞記者は、なぜそんな女性に寄り添って取材を続けたの？尻切れトンボ感はあるものの、本作の問題提起をしっかり受け止めたい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■ペルー出身の女性監督が、自国の乳児売買問題にメス！■□■

阪本順治監督の『闇の子供たち』（08年）は、タイにおける生きた人間の臓器提供による臓器移植や、人身売買・幼児売春の闇組織の実態を描いた問題提起作だった（『シネマ20』153頁）。また、幼児誘拐事件を描いた社会問題提起作には、①アンジェリーナ・ジョリー主演の『チェンジリング』（08年）（『シネマ22』51頁）、②陳可辛（ピーター・チャン）監督の中国映画『最愛の子（親愛的）』（14年）（『シネマ44』270頁）等がある。しかして、ペルー出身の女性監督メリーナ・レオンは本作で、自国で起きたペルーの乳児売買問題にメスを！

南米の国ペルーは、2021年6月、アルベルト・フジモリ元大統領の娘であるケイコ・フジモリ氏の3度目の大統領選挙への挑戦で世界中の注目を浴びたが、結局50.12% vs 49.87%の僅差で敗退。急進左派政権による新政局は混沌としている。本作の時代

は、それから遡ること30数年、今以上の政情不安に揺れる、1988年だ。

本作冒頭、私が子供時代の昭和30年代に見た白黒ブラウン管テレビに「ビバ！マルクス・レーニン 毛沢東主義」、「史上最悪のインフレ114%！」、「バス運賃100%値上げ」、「テロ活動が激化 爆破 暗殺 収奪・・・」、「電気 電話 医薬品 値上げ」、「衝撃の一括値上げ！」、「断水と停電続く」、「ビバ！武力闘争」等々の記録写真や新聞記事が映し出されるから、まずはこれに注目！

■□■先住民の若夫婦の生活は？妻の出産は？■□■

同じ日に続けて観た『モロッコ、彼女たちの朝』（19年）の主人公は、臨月のお腹を抱えた若い女性だったが、それは本作も同じ。本作のそれは、20歳のヘオルヒナ・コンドリ“ヘオ”（パメラ・メンドーサ）だが、ヘオも23歳の夫レオ・キスペ（ルシオ・ロハス）も、ペルー南部、中央アンデスに位置する都市、アヤクチョに住む先住民だ。

家族や親戚たちに見守られる中、歌と踊りで“母なる大地”（パチャママ）を讃える旅立ちの儀式を済ませた若夫婦は、首都リマ近郊の、荒涼たる土地の斜面に建てられたバラックに移り住んだ。妊娠中のヘオは、夫が働く市場で仕入れたジャガイモを露店で売り、生計の足しにしていたが、ある日、妊婦に無償医療を提供するというサンベニート財団の情報をラジオで知ったヘオはバスでその産院に出かけ、受診することに。後日、露店で陣痛が始まったヘオは、痛みをこらえながらやっとの思いで産院にたどり着き、無事出産を済ませたが、それが母子の“今生の別れ”になろうとは！

本作は、メリーナ・レオン監督の父親イスマエル・レオンがレブブリカ紙の記者として1980年代前半に、政府高官や判事たちとの関りの中で、海外との違法養子縁組（乳児売買）を調査していた事件を、少し時代を移行させ、メリーナ・レオン監督流の問題意識で描いたもの。もぬけの殻となった産院で途方に暮れたヘオは、その後、警察、そして裁判所に訴え出たが、「有権者番号は？」と問われると？“有権者番号”を持っていない先住民の若夫婦はハナから取り合ってもらえないらしい。こりゃひどい。そして、なるほど、これが1988年のペルーの実態なの！

■□■この新聞記者に注目！彼の取材はどこまで？■□■

ペルーでは、先住民の地位や権利がどうなっているのか、また、有権者番号にどれだけの意味があるのか、等々は日本人にはわからないが、本作導入部に見るペルーの実態は、メチャひどい。しかし、警察でも裁判所でも全く取り合ってくれなかったヘオの訴えに耳を傾けてくれたのは、ある日無理やり入り込んでいったレフォルマ新聞社で「娘を盗まれた！生後3日目の娘が！」と絶叫するヘオの姿に注目したペドロ・カンボス（トミー・パラッガ）だ。ヘオの訴えにペドロが反応を示したところから、本作の本格的ストーリーが始まっていく。このペドロがメリーナ・レオン監督の父親を見本にしていることは明らかだが、このペドロも白人ではなく、メスティーソという白人と先住民との混血の男性に設定しているのが本作のミソだ。

新聞社の上司が別の重大事件を担当していたペドロに対して、すぐにへオの事件を取材する許可を与えるストーリー展開は少し安易すぎるが、大新聞社をバックにしたペドロはいかなる取材に乗り出すの？それが本作中盤のポイントになるから、妊婦に無償医療を提供するという情報を流していたラジオ局への取材や、産院の賃貸借契約の取材ぶりをしっかり確認したい。

そんな取材の中で、ペドロは「自分たちも生んだばかりの赤ん坊を奪われた」という若い女性と接触できたからラッキー。さらに、ペドロは知り合いの空港職員を通して、秘密裏に「ペルー司法省・出国養子リスト」を手に入れたから、これはかなり大きな事件（ヤマ）だ。ペドロはその足で裁判所に赴き、判事に対して「なぜ養子の承認を多く・・・」と質問したが、判事は「私が選んだ訳じゃない。書類が完璧なら承認するだけだ」と答えるだけだった。ここまで動き回るペドロの新聞記者魂は立派だが、乳児売買問題が国際的な組織の中で闇から闇に行われているとしたら、それを嗅ぎまわるペドロはヤバいのでは？そんな心配の中、ペドロのその後の取材は？

■□■友人の役者の登場は？『ガラスの動物園』の公演は？■□■

私は大学時代にテネシー・ウィリアムスの戯曲『ガラスの動物園』を巡って徹夜の議論をしたことをよく覚えているが、本作では本筋のストーリーとは全く別に、ペドロが近くに住む知り合いの役者イサ（マイコル・エルナンデス）との交友を深めていくストーリーが描かれる。イサはキューバからの移民だが、そんな男はペルーではどんな扱いを？『ガラスの動物園』の公演で彼はどんな役を与えられているの？へオは先住民だし、ペドロはメスティーゾだが、キューバ移民のイサはどのレベル？

私はそんな興味でスクリーンを覗いていたが、ある日『ガラスの動物園』の公演を控えてリハーサルを重ねているイサとペドロが狭いキッチンの中でラジオから聴こえてくる曲に合わせてダンスを始めると、アレレ、そこには2人が激しくキスを交わす風景が。ええ、これは一体何？メリーナ・レオン監督は、なぜサブストーリーとして、こんなストーリーを・・・？

■□■真相解明に向けた取材は？追及は？リスクは？■□■

ペドロの取材ぶりは大手新聞社の記者としてはかなり強引だが、それによって乳児売買の国際的な秘密組織があるらしいということまでたどり着いたから、立派なもの。そして今、社の同僚からの情報によると、再び妊婦への無償医療が行われているらしい。そこで、ペドロは先輩カメラマンと共に大河沿いの町イキトスに向かうことに。

本作は、メリーナ・レオン監督が新聞記者だった父から聞いた話を元に脚本を書いた映画だから、ある意味、どんな経過を経ても、どんな結論に導いてもいいわけだが、「Based on True Story」という以上、あまりいい加減な企画にすることができないのは当然。ペドロは、以前の取材でも2人の女性から「自分たちも生んだばかりの赤ん坊を奪われた」という情報を得ていたが、今回も、若い女性から「自分のバーで一杯やらないか」と誘われ

たうえ、「気を付けて。産院は危険だから。自分の息子を買ったことがあるの」と言われることに。ここらあたりのペドロの取材は、どこまで「Based on True Story」なの？それとも、メリーナ・レオン監督の勝手な脚本なの？それはわからないが、さあ、ペドロの取材はどこまで真相解明に向かっていくの？逆に、そのリスクは？

■□■ラストに流れる子守唄は？へオはなぜこの歌を？■□■

そう思っていたが、ペドロの取材はそこで尻切れトンボになってしまうから、アレレ、アレレ。『闇の子供たち』は、江口洋介扮するタイ駐在の日本人新聞記者と、宮崎あおい扮するボランティア女性の執念のにじむ取材の成果として、タイの子供たちの“臓器売買”という“驚くべき実態”が明示されていたから、鋭い社会問題提起作になっていた。しかし本作は、ペドロが取材した乳児売買事件の一部が明示されるだけで、全貌が解明されるものではない。それはなぜ？冒頭のブラウン管に映し出される断片的なニュースでわかる通りの不安定な政治情勢下のペルーでは、きっとメリーナ・レオン監督の父親の取材にも限界があったためだ。そう考えれば、メリーナ・レオン監督がそんな中途半端な形で本作を終了させたのも仕方ない。

しかして、そんなメリーナ・レオン監督が本作の結末に用意したのは、へオが1人で「へオルヒナの子守歌」を歌うシーン。子守歌といえば、「ブラームスの子守歌」や「シューベルトの子守歌」が有名だし、日本でも「竹田の子守唄」等々、有名なものがたくさんある。それと同じように（?）、「へオルヒナの子守歌」も作者不明ながら、ペルーの伝統的な子守歌らしい。もちろん、その言葉も意味も日本人には容易に理解できないが、雰囲気（へオの悲しみ）だけは明確に伝わってくる。なるほど、こんな結末の映画だから、本作は英題も邦題も『SONG WITHOUT A NAME／名もなき歌』とされているわけだ。“中途半端感”はあるものの、1988年のペルーにおける乳児売買事件について、なるほど、なるほど。

2021（令和3）年9月15日記